

## MDBs で活躍する日本人職員

昨今の経済・金融危機や気候変動などグローバルな課題への対応が求められているなか、MDBs の果たす役割はますます重要性を増しています。しかしながら MDBs で働く日本人職員数は、日本の資金面での貢献と比較して十分とはいえ、より多くの熱意ある日本人職員の採用を各 MDB に強く働きかけています。各 MDB もリクルート・ミッションの日本への派遣等、その声に応じているところであり、例えば世界銀行では、世銀職員になるための若手専門職員養成プログラムであるヤング・プロフェッショナル・プログラム（YPP）や将来の正規職員となるために必要な知識・経験を積む機会を提供するジュニア・プロフェッショナル・オフィサー（JPO）等様々な採用窓口を設けています。

MDBs で働く日本人職員の声 ..... P.20

MDBs でのキャリアを志す皆さんへ ..... P.22

- ・ YPP（Young Professional Program）、  
JPO（Junior Professional Officer）採用者からのメッセージ
- ・ 人事担当者からのメッセージ
- ・ 採用関連一覧

## あなたもMDBsで働いてみませんか？

### ● 世界銀行

#### 南アジア地域総局 西尾 昭彦



私は海外経済協力基金(当時)の東京本部で5年間働いたあと1988年に Young Professional Programとして世界銀行に入行し、インドネシアの農業エコノミストとしてキャリアを始めました。スマトラなどのジャングルや湿地帯を走り回る「インディアン・ジョーンズ」のような生活を何年か続け、開発という仕事の面白さと大変さを存分に味わうことができました。その後中国に対する支援計画の策定や最貧国を支援するための原資を確保するための交渉などに携わり、現在は南アジア総局の戦略業務担当局長としてワシントン DC本部にて勤務しています。8カ国それぞれの開発ニーズを把握し、事業予算や融資する資金を確保し、三百人を超える総局スタッフの人事を監督し、世界銀行ならではの知見・技術がプロジェクトに組み込まれているかの確認する等、全体の舵取りを担っています。

世界銀行グループは貧困削減や開発支援を目的とし、現在約1400のプロジェクト(約18兆円)に対し100カ国以上に融資しています。南アジアは国の

数こそ少ないですが、世界の絶対貧困層の4割以上を占めるため、貧困撲滅を主要目的とする世銀にとっては非常に重要な地域です。インドやスリランカを初めとする新興国が急成長し、開発援助の内容も徐々に変わり、将来更なる成長が見込まれます。一方で、国家間の歴史的軋轢による地域内貿易の低迷、頻繁に発生するテロ、気候変動による自然災害の増加など根深い問題も多く、緊張感も必要とされる地域です。この様な状況の中、専門知識を生かし、色々な国籍の同僚と綿密に協力し、途上国側の意向を汲み上げ、予想外の問題に臨機応変に対処する能力が、世界銀行では非常に重視されます。先月、ある仕事のため昔深く関わった中国に久しぶりに戻りました。僕が特に関与した結核を予防・治療するプロジェクトは何百万人かの貧しい人々を助け、成功裏に完了していました。当時力をあわせて働いた中国人スタッフたちと数年振りに食卓を囲み、旧交を温めることができました。自分の持てる力をすべて使って勝負し、貧困という世界的な問題と戦い、国籍・人種・宗教の違いなど関係なく信頼関係を築くことができるのが、世銀という職場の素晴らしさだと思います。是非多くの方々に世界銀行の業務内容を知っていただき、我々の職場に興味を持っていただけたらと期待しております。

### ● アジア開発銀行 (ADB)

#### 太平洋局次長 小川典子



アジア開発銀行(ADB)に入行してから、20年目に入りました。現在は小さな太平洋諸国に支援を行う局の次長をしています。入行してからこれまでの間、戦略政策企画局の開発成果重視の業務管理(リザルツマネジメント)課長、副総裁(知識管理)顧問、東南および中央東アジア局や広報部のスタッフなど、多様な業務に携わってきました。

大学生のころからぼんやりと経済開発問題に興味がありましたが、この分野でのキャリアを目指そうと決心したのは2つのきっかけがありました。一つは、大学院在学中に経験した米州開発銀行でのインターンシップ。丁度、環境的・社会的に持続可能な開発を求める声が高まり始めた頃で、開発支援への関心が一層高まりました。もう一つは、アメリカの投資銀行に勤務していた時に滞在していたメキシコでの経験。貧富の差を目の当たりにして衝撃を受け、途上国支援に携わろうという意志が強まりました。

ADBの魅力の一つには、スタッフ間のチームワークの強さがあります。一つの事業は、経済学やエンジニアリングを始め、環境や社会開発、ジェンダー、法律、プロジェクト管理などの様々な専門家からなるチームが担当します。多種多様な専門性と様々な途上国経験と知識が重なり合って、より貢献度の高い事業が出来上がっていくのです。この過程には、20年経った今でも感動します。

ADBのもう一つの魅力としては、改革精神の高さが挙げられます。アジアは世界の中でも最も急速に成長を遂げているダイナミックな地域です。当然、開発途上加盟国からの要求も、より付加価値の高い洗練されたサービスへと移行しています。そういったアジアで貢献度の高い開発銀行であり続けるため、ADBは常に前向きに戦略を立て、業務と組織の改革に取り込んでいます。昨年はADBの長期戦略『ストラテジー2020』の中間レビューを終え、これに基づく改革計画を立ち上げました。主な改革分野としては、事業の実効性を重視したプロジェクト実施管理能力の改善、各国駐在事務所への意思決定権限の委譲と組織強化、民間部門業務の強化などがあります。

「貧困のないアジア太平洋地域」というビジョンの実現の為に、知識と情熱をもったスタッフがチームとなって活躍するADBでのキャリアは、とても手応えのあるものです。より多くの日本人の方が、私たちと一緒にADBで活躍して頂けることを願っています。

### ● 米州開発銀行 (IDB) グループ

#### ストラクチャード&コーポレートファイナンス局 戸田一郎



私は日本の大学で中南米の地域研究および国際関係論を専攻し、メキシコに留学したことをきっかけに、途上国の開発支援の仕事に興味を持ちました。その後、政府系金融機関で中南米向け融資業務や企画・評価業務等に携わった後、2005年よりIDBの民間部門向け融資の開発効果にかかる業務に従事しています。

具体的には、これまで主にIDBが融資する案件が実施国の経済・社会発展に及ぼす効果とIDBがもたらす国際機関ならではの付加価値を融資の実施前後に分析・評価することと、そのための枠組み作りを担当してきました。加えて近年はIDBの業務全体が中南米諸国の地域開発にもたらす成果を計るフレームワークの策定と実施や、世界規模での開発援助の効果を高めるための様々なイニシアチブに対するIDBの貢献にも携わっています。この過程では、他の他国・二国間機関や先進国・途上国政府、民間企業・金融機関、

シンクタンク、学術関係者など幅広いプレーヤーと協調し、開発効果を計る指標の統一化、民間企業の社会貢献や開発金融機関の活動効果の計測手法にかかるベストプラクティスの共有、開発援助効果促進のための具体策の議論等を通じて、開発援助コミュニティ全体の役割の強化に努めています。

MDBsで働く魅力は、何よりも貧困・所得格差や気候変動といった国際社会の課題に、金融という手段を通じてより直接的に貢献できることにあると思います。こうした貢献をより効果的なものにするためには、最新の知識を取得し、様々な経験を積むことにより自らの専門性を高めるとともに、会議等で議論をリードし、利害の異なるプレーヤー達をまとめていくコミュニケーション能力を磨くことが必要となり、こうした努力をする中で常に自分を成長させられることもMDBsで働く魅力といえます。また、多様な国籍とバックグラウンドを持ちながら開発という共通の目的を持って一緒に仕事をする人々とのつながりは最大の財産といえるでしょう。MDBsで働くようになるにも、同様にまずは農業、教育、保健、経営、金融、法律、環境、IT等、自分の興味のある分野で学術・実務経験を積んで専門性を磨きながら同時に開発に対する関心を持ち続け、人的なネットワークを大切に築いていくことが重要なのではと思います。

## ● アフリカ開発銀行（AfDB）

上級投資官 民間局インフラストラクチャー・ファイナンス&PPP 課  
木下直茂



私は、2011年末にアフリカ開発銀行に入学し、以来、民間局のインフラ投資官(Investment Officer)としてアフリカ各国のプロジェクト業務に従事しております。2014年にアフリカ開発銀行の本部がチュニジアからコートジボアールに移転したことから、現在はコートジボアールの最大都市であるアビジャンにて勤務しております。

アフリカ開発銀行への就職は、2010年末の東京リクルートミッションへの参加をきっかけとして実現しました。入学した時点で、既に、総合商社、外資系エネルギー会社、通信会社において20年近くのキャリアを経験しており、まさに人生の折り返し地点における挑戦でした。というのも、それまでもインフラの業務には携わっていたものの、国際機関や銀行業務の経験はなく、アフリカに訪問したこともほとんどなかったからです。

それでも途上国支援の仕事に携わろうとした理由は、学生時代にメキシコに留学し、中南米における内戦や貧困の様子を垣間見たこと、更に、総合商社や通信会社において、アジア、中東、そして中南米における、情報通信、交通、保健、電力のプロジェクトを経験し、インフラの開発を通じて途上国の

発展に寄与したいという思いが強かったからです。

私を手掛けているプロジェクトは電力や情報通信の分野が主ですが、関わっている国は南アフリカ、ケニア、モロッコ、チャド等です。投融資は民間の事業体に対するものですが、その手法はプロジェクトファイナンスと呼ばれるものです。プロジェクトファイナンスではスポンサーやレンダー等の多くのステークホルダーが世界中から集まり、それぞれ駆け引きが行われながら、プロジェクトが組成されていきます。行内においては、投資官がプロジェクト審査チームを取り纏め、承認プロセスを進めていきます。そこでは金融の専門性や、技術的な知識、更には情報収集力が要求されますが、それ以上に求められるのが、事業体のニーズを察する営業力や、行内外の関係者とのコーディネーション力や交渉力であり、極めて泥臭い能力が求められます。

入学した当初は、電話会議における様々な英語のアクセントの聞き取りと、大量の関連書類の読み取りに苦労しました。また、銀行業務を経験していなかった為、同僚達に教を請いながら仕事を進める必要がありました。毎日が苦勞の連続で何度も壁にぶつかりましたが、3年間が過ぎ、ようやく、複数のプロジェクトをリードできるようになりました。それが出来たのは世界中から集まっている仲間を支えられたことと、アフリカ大陸の大きさや助けられたからだと思います。

現在、アフリカ開発銀行の日本人職員は14人です。アフリカは可能性に満ちた大陸であり、毎日が新たな発見の連続です。多くの日本人の皆さんが当行に応募し、共にアフリカの開発を目指すことを希望しております。

## ● 欧州復興開発銀行（EBRD）

プリンシパル評価マネージャー・事後評価部  
桜井洋美



〈民間・国際機関勤務の総まとめとしての事後評価部〉

私が大学の法学部を卒業しフランスの銀行の東京支店に入学したのはなんと雇用機会均等法以前の時代です。それから東京・パリ・ロンドンと引越す15年間、民間の金融機関で貿易金融・法人融資・仕組みファイナンス・プロジェクトファイナンスを経験する傍ら、米国でMBA、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)で社会科学の修士をとりました。特にロンドンでPFIやPPPが本格化し始めた90年代前半に案件に取り組めたことは貴重な経験です。私が市中銀行の仕事に疑問を持ち始めたのも90年半ば、証券化という新スキームが現れ、急激に流行り始めた頃です。リスクの観念・経済パラダイムが変化しているのを実感し、マーケットを離れて公的金融機関に応募することにしました。マニラのアジア開発銀行(ADB)で中国や東南アジアの交通・通信インフラ造りの財務専門家として5年間従事し、EBRDの事後評価部に採用されました。

国際機関では古い事後評価機能ですが、その技術・方法論は日々発展しています。国際機関の株主である各国の納税者や市民が経済危機を経て「結

果を出したと主張するならちゃんと見せろ」とソーシャルメディア等を通じ積極的に意思表示するようになったことも一因です。

事後評価部は民間にもある内部監査やコンプライアンスとは違い、銀行機能から独立して理事会の下に位置します。EBRDがその設立趣旨にのっとった仕事をしているか、案件や政策を実施した結果から判断しますが、「事後」というのが重要です。どの組織でも事前評価の手法は昔から発達していますが、事実と比べなければ所詮「夢物語作り」です。この夢物語度を測り、学ぶべきことを咀嚼し、組織の意思決定者や実行者にフィードバックするのが事後評価者で、各国民に対し説明責任を負う国際機関では不可欠な存在です。

さて事後評価者に求められる要素は、・・・イチロー選手のように打って、守って、走るオールラウンドプレイヤーであること。また General specialistである以上に Special generalistであること。規準・指針と透明性の高い方法論をマスターし、偏見や先入観にとらわれない公平で客観的な人間性等々。これが理想ですね。

EBRDは大半の顧客が民間なので公的投融資という意識が薄い職員もいれば、設立趣旨である市場経済移行への貢献が低いと評価され怒って詰め寄ってくる人もいます。不成功だった案件のカギはガバナンスと透明性だったということも往々にしてあります。いろいろな意味で日本人には難しい仕事ではありますが、国際機関を目指している皆さんに、民間にはない機能があることを参考にして頂ければ幸いです。

